

ブロンテ書簡研究（6）

岩 上 はる子*

（十）1843年

1843年1月27日、シャーロットは再びブリュッセルに向かった。今度は一人きりの旅だった。リーズ発午前9時の列車は2時間も遅れ、ロンドン到着は午後10時を回っていた。そのためシャーロットはチャプター・コーヒー・ハウスでの宿泊を諦め、ロンドン橋の埠頭まで直行し、オステンド行きの船に乗り込んだ。28日朝に出航した船は午後9時にオステンドに入港し、シャーロットはそこで一泊した後、翌日の昼の列車でブリュッセルに向かい、29日夕方イザベル通りに到着した。

2ヶ月ぶりに戻ったシャーロットをエジェ夫妻は暖かく迎え、エミリーがいないシャーロットに自宅の居間を使うよう勧めてくれた。友人メアリ・テイラーはすでにドイツに移っていたが、ブリュッセルにはメアリの親戚ディクソン家の人々（特に5歳年上のメアリとは親しくしていた）や、ウィールライト家の人々が居住し、一人きりのシャーロットに何かと声をかけてくれた。教師としての年俵は16ポンドで、その中から洗濯代その他を払うと、ドイツ語の授業料に事欠くほどであったが、授業の負担は軽く、シャーロットはこれまでのシジウィック家やホワイト家での家庭教師の経験に比較して、現在の状況にはおおむね満足している。もはや生徒ではなく教師となったシャーロットは、エジェ氏の授業を受ける機会はなかったが、逆に彼女がエジェ氏と義弟に英語を教えることになった。

順調な生活に見えたが、3月になっても冷え込みの厳しいブリュッセルで、シャーロットは孤独に凍えていた。生来、社交性に乏しいシャーロットは同僚とはうち解けず、エジェ家の居間も居心地の良い場所とはならなかった。そこには昼間は教師たちがたむろし、夜は生後間もない乳飲み子を抱えたエジェ家の団らんを邪魔するのは気が引けた。エレン宛の4月(?)の手紙は、「生活は変化に乏しく単調で、多くの人々の中に在りながら孤独感につきまといわれ」「エジェ氏以外の男性とは一言も交わさず、その彼ともごく稀にしか話さない」「隠者のような生活」を送っていることを伝えている。そのエジェ氏への英語のレッスンも、理由も明らかにされないままに、5月、突然中止された。それまでのシャーロットの手紙の中に、エジェ夫人に対する非難めいた文言は見あたらないが、5月29日宛のエミリー宛の手紙には、はっきりと彼女たちが互いに対して好意を持っていないことが書かれている。シャーロットは同僚のブランシュ嬢がエジェ夫人のスパイであり、自分の行動の一部始終を夫人に報告していると疑い、「夫人に素晴らしく従順なエジェ氏」の彼女への「好意が失われた」と確信している。

孤独の中でシャーロットはしばしば故郷を思い出し、10代の初めからブランウェルと書き続けてきた〈アングリヤ物語〉を懐かしんだり（ブランウェル宛、5月1日付け）、エミリの〈ゴンドル物語〉に言及したりしている（エミリ宛、5月29日付け）。現実から夢想の世界に逃避しようとする、かつてのロウ・ヘッド時代の悪夢が甦ろうとしていた。6月末には帰国の気持ちが萌したが、ドイツ語を習得するという大義名分と自尊心だけが、シャーロットを踏みとどまらせた。この頃にはエジェ夫人の冷淡さの理由がシャーロットにも察せられ、「吹き出したいような、泣き出したいような気持ち」になるが、それは親友のエレンにも打ち明けられないものであった（エレン宛、6月末付け）。

8月に入り、長い休暇が始まろうとしていた。ガランとした校舎に一人きりで取り残される恐怖に、シャーロットは脅える。その休暇が2週間あまり過ぎた9月2日付けのエミリ宛の手紙で、シャーロットは当てもなく街をさまよひ歩き、立ち寄ったサン・ギューデル教会で「奇妙な考えが浮かび」「本物の告白」をしたことを伝えている。告白の内容については触れていないが、これまでカトリック教徒に対して強い嫌悪感を抱いてきたシャーロットが告白するに至るまでには、かなり精神的に追いつめられていたことは想像に難くない。この経験は『ヴィレット』(Villette, 1853)において、孤独な長い休暇で精神的な変調をきたした主人公ルーシー・スノウの体験として描かれることになる。

親しく行き来していたメアリ・ディクソンもウィールライト家も帰国し、一人の友人もいなくなったシャーロットにとって、ブリュッセルは耐えがたい場所となった。それでも帰るべき「口実が見つからず」「教区の世話になる年寄りのように……役に立たない」（エミリ宛、10月1日付け）人間として舞い戻ることは自尊心が許さず、シャーロットは帰国の決心がつかないでいる。しかし10月13日付けのエレンへの手紙では、その意地も捨て、エジェ夫人に辞意を表明したことを伝えている。エジェ氏の強い要請でいったんは踏み留まるものの、およそ二ヶ月後の12月19日付けのエミリへの手紙で、年内に帰国する決心を伝えている。彼女の出発は最終的には1844年1月1日になった。

[1843年1月6日頃?]

[ハワース]

愛するネル

手紙を書かなくてはならないのに読むに値するものがないというのは、奇妙なものです。

ご無事でお帰りのこと、何よりです。2通もお手紙くださるなんて、あなたってなんて良い方なのでしょう。特にあんなに長いお便りを。

我が家の一人一人によろしくと書きながら、なぜブランウェルの名前だけ念入りにはずしたのか、本人が知りたいと言っています。

あなたを怒らせるようなことをしたかどうか、もしそうなら、どんなことなのか知りたいそうです。

それとも、うら若い女性が紳士の名前を口にするのは、はしたないと考えたのかしら。

あなたがお帰りになった後、わたしたちは一度、^{荒野}の散歩に出かけました。

キースリーにも出かけて^り、知り合いにばったり出会いました。彼はわたしたちを見て驚いたような声を上げましたが、ようやく落ち着くと、わたしが死んで火葬されたという話を聞いたというではありませんか！

お便りではジョージの手帳のことは何も触れていませんでしたが、見つかったのかしら。
ジョー・テイラーがそんなに頻繁にブルックロイドに来ることについては、どう考えたらよいか、わたしにはわかりかねます。

「張り合う兄弟」²⁾という題名の悲劇があります。

ジョーのポケットに入っていた例の2通の手紙はジョンからのものだと思いますか。

馬鹿げた話に入って行きそうなので、この辺で止めておきます。

あなたが帰ってからも、わたしは大きな焼きだんごみたいに中身がしっかりと詰まっています。

フェアレス³⁾のノートはお返しします。貴重なものに違いありませんので。アンのは取っておきます。ああ、かわいそうなO.P.V [ヴィンセント]⁴⁾！ 本当にかわいそう！

[署名なし]

- 1) キースリーでは、キースリー機械工協会に図書室があったほか、トマス・ダケット・ハドソン (Thomas Duckett Hudson) の経営する貸本屋があった。
- 2) リチャード・カンバーランド (Richard Cumberland, 1732-1811) の 'The Brothers' という喜劇、あるいは1786年に匿名で出版された 'The Rival Brothers' を指していると思われる。
- 3) アンリーに住む兄ヘンリーの家に滞在中にエレンが会った人物か。
- 4) エレンは牧師補ヴィンセントの求愛を断っている。1840年4月30日付け、1841年11月2日付け書簡を参照。

[1843年1月14日?]

[ハワース]

愛するエレン

わたしの縦縞模様のドレスは斜めに裁断されてはいません——モスリンを一巻送ってくださって本当に感謝しています——ソファの下にブラシが見つかりましたし、先週の土曜日にはパッド¹⁾も見つかりました——息が詰まるほどあなたを抱きしめてあげたいわ。

ブランウェルにあなたの伝言を伝えます。聖書を忘れていらっしやいましたが、どうやってお届けしたらよいかしら。

出発の日はまだはっきりしませんが、今月の最後の週あたりでしょうか。あなたもいらっしやる?

バーストールの大夜会用にあなたが選んだ衣装はとっても素敵です。ピンクのペチコートに黒いジャケット、バラの花輪と言っていたと思いますが。きれいですね。ちょっとした変化に、わたしなら黒いコート、ピロードの立ち襟、チョッキ、白いズボンにおしゃれなブーツをお勧めします。

この手紙ではあなたのことを、ただエレンと呼んでいます——というの、まもなくJ・テイラー夫人になるだろうことはわかっていますが、頭文字のJがジョンのことなのかジョーのことなのか、わたしにはまったくわかりませんので²⁾。それは全く謎です。

時間があったら、ヴィンセント氏の挽歌を書くつもりです。気の毒な方！工場主たちは彼をすっかり打ちのめしています。

わたしの住所は次の通りです。

マダム・エジェ・パラン方、イザベル通り32番地、ブリュッセル、ベルギー。

いい子だから、またお便りちょうだい。すぐにね。2週間もしたら、もう書けなくなってしまう

でしょうから。

お母さまとマーシーによろしく。

C Br

- 1) 婦人のスカートを膨らませるための詰め物。
- 2) メアリー・テイラーの兄弟。John が兄で、Joeが弟。

〔1843年〕 1月30日

ブリュッセル

愛するエレン

先週の金曜日9時にリーズを発ちロンドンに向かいました¹⁾。〔汽車が〕2時間も遅れて、ロンドンに着いたのは夜10時を回っていました。ユーストン・スクウェアに着くと、直ちに馬車でロンドン橋の棧橋に直行しました。郵便船は棧橋に係留されていて、その晩に乗船し、翌朝、出航しました²⁾。船は快調に進み、午後9時にオステンドに入港しました。翌日、昼12時の列車に乗り込み、夕方7時にイザベル通りに到着した次第です³⁾。エジェ夫人の優しいお出迎えを受けました。3日にわたる旅の緊張で、まだ疲れが抜けません。何事も起こりませんでしたでしたが、それでもやはり心細い気がしていましたので。今日の午後、ミス・ディクソンが来ました。1月の最後の週にはわたしがブリュッセルに戻っているだろうと、メアリー・テイラーから聞いたそうです。彼女は見るからに優雅で淑女然としていて、ジョー・テイラーにお伝えください。日曜にはあちらに伺う予定です。住所をお知らせします。マダム・エジェ・パラン方、ミス・ブロンテ、イザベル通り32番地、ブリュッセル、ベルギーとしてください。

- 1) シャーロットの旅は1月27日に始まり、ダービー、ラグビー経由でロンドンに到着した。
- 2) 28日（土曜日）に「リヴァプール伯爵号」に乗船した。初めての一人旅だった。
- 3) 28日の夜はオステンドに宿泊し、翌29日の昼の列車でブリュッセルに向かった。

〔1843年〕 3月6日

ブリュッセル

愛するネル

前便が着いたか否かわかりませんが、また届けて下さるといふせっかくの機会ですので、お便りしたいと思います。もちろん、もうすっかり落ち着きました。仕事はまだそれほど忙しくはなく、英語を教える傍ら、ドイツ語を勉強する時間もあります。自分は恵まれていると思うべきで、好運に感謝しなければと思っています。感謝の気持ちを忘れないようにしたいものです。いつも気持ちを引き立て、寂しいなどと思わず、お付き合いや友情、何と呼ぶにせよ、そうしたものをさえ求めなければ、かなりうまくやっていけるものと思います。以前にも書きましたが、この家では注目と尊敬に値するのはエジェ夫妻のみです。当然ですが、かれらとはいつでもどこか、ごくたまにしかご一緒できません。こちらに戻った当初は、居間を我が家と思って、授業の時以外はいつでも自由に使うように言われました。でもそういうわけにはいきません。そこは昼間はみんなのたまり場で、

音楽の教師などがたえず出入りしています。夜になってまでエジェ家の団欒のじゃまをするつもりはないし、またしてはならないと思うのです。そんなわけで授業のない時はいつも大体独りでいます。でもそれはたいしたことではありません。

今はエジェ氏と義弟のシャペール氏に、定期的に英語を教えています。エジェ氏の最初の奥さまが、シャペール氏の現在の奥さまの妹さんだったのです。彼ら、とくにエジェ氏の上達ぶりはめざましく、もうかなりきちんとした英語が話せるようになりました。イギリス人らしい発音を教えようとするわたしの努力、それを真似ようとする彼らの空しい試みをご覧になるなり、聞くなりしたら、あなたはお腹を抱えて笑うことでしょう。

感謝祭が終わり、陰鬱な禁欲の四旬節に入ったところです。初日の朝食はミルクなしのコーヒー、昼食は酢をふっただけの野菜にわずかな塩魚、夕食はパンだけという具合でした。カーニバルはもっぱら仮面劇と無言劇です。エジェ氏がわたしともうひとりの生徒を、観劇に町へ連れて行ってくださいました。人の群れや賑わいは楽しかったけれど、仮面劇はパツとしませんでした。

ディクソン家へは何度かおじゃまし、とても親切にいただきました。この手紙はたぶんトムが届けてくれるでしょう。ミス・ディクソンは優雅で垢抜けた素敵な方です。彼女についてのわたしの見方は変わりません。これからもずっと。彼女がブリュッセルを去ったら、わたしにはもう行くところがありません。残念でなりません。メアリ・ウォーカーが結婚すること、ジョー・テイラーの病気が思わしくないことを聞きました。いったいどうしたのでしょうか。

メアリからは手紙を 2 通もらっていたのに、具合が悪いことなどはまるで触れず、愚痴ひとつこぼしていませんでした。でもその手紙は、幸せいっぱいという人の手紙ではありませんでした。彼女にはわたしにとってのエジェ氏のような人がいません。本を貸してくれたり、話をしてくれるような人が。

マーシーとお母さまによろしく。何か変わったことがあったら知らせてください。ジョージ・オールバット夫人に会ったらよろしく伝えてください。

この手紙を長々と書いても、あなたにはあまり益がないでしょう。さようなら、愛しいネル。わたしの声はあなたに届きそうもありません。ふたりの間に広がる英仏海峡の波音が、きっと声をかき消してしまうでしょうから。

メアリ・ディクソン宛 [1843年初旬]

[ブリュッセル]

親愛なるミス・ディクソン

木曜日にはお伺いできないことになりました。エジェ夫人に許可を求めたところ、ご夫妻が一緒に出かける約束を既にしてしまったとおっしゃるのです。けれどもご都合がよろしければ、金曜日の午後 2 時に伺います。エジェ氏が夕食後の英語のレッスンを希望していますので、4 時までには帰らなければなりません。

わたしの不運な肖像画は諦めてあなたに譲ります——その輪郭はとても整っているとは言えない状況なので、練習にはもって来いかもしれません。でも独立独歩の気概を表していますから、眺めると啓発されるでしょうか。けれどわたしの肖像画¹⁾がメアリ・テイラーに喜ばれるかも知れないという博愛的な考えは間違っています。彼女にあげたりなさらないでください。おあげになったとしても、お礼を期待してはいけません。彼女は確かにわたしのことを好きですけど、わたし

の顔の絵など欲しくないはずですよ²⁾。彼女に尋ねてみれば、きっと大まじめに、偽らずにそう言うはずですよ。

あなたの絵のモデルになるのが気が進まない、などと思わないでください。喜んでお伺いして、しばらくの間あなたのために座りましょう。たとえ、画家の習慣で、話すことも首を動かすことも許して下さらないとしてもね。

- 1) シャーロットはメアリ・ディクソンの肖像を描いたか、交換にもらったものと思われる。
- 2) メアリはシャーロットの容貌については、ギヤスケル夫人への手紙の中で遠慮のない発言をしている。（ギヤスケル夫人『シャーロット・ブロンテの生涯』参照）

[1843年4月?]

{ブリュッセル}

愛するエレン

誉めるべきときは率直に誉めるのがよいかと思います。先日のお便りはまさに賞賛に値するものでした——その長さといい、面白さといい——余力があれば、直ちにもっと長い手紙をもう一通いただけないものかしら。

メアリ・テイラーの大胆な行動³⁾については、もう聞いているでしょう。彼女の公式な手紙で、詳しいことは一切おわかりかと思えます。とくにお知らせすることもないので、わたしの意見を述べることにします。この問題をいろいろな角度から考えてみましたが、誠に理に叶っているというほかありません。この意見はけっして安易な思いつきなどではなくて、それを結論とするまでには、5、6日を要したことをお忘れなく。

お手紙のはじめの部分（主にジョー・テイラーに関してですが）を読んだら、わたしが何というか、どう思うかはわかっていると言うのですね。でもお構いなく。わたしは自分の好きなように考えますから。ネリー、わたしは特に何とも思いはしなかったでしょう。このちょっとした挑発がなかったら。おかげでよくよく考えることになりました。エレン、自分の気持ちを大切にささい。とらわれず自由にしてください。でもそんな忠告も無用でしょう。分別のあるあなたのことですから、みすみす城を明け渡すようなことはしないと思えます。

ブリュッセルに来られるといった話はありませんか。2月、そして3月も大半がひどい寒さでした。あなたが一緒に来られなかったのはよかったです。わたしのように凍え、わたしのように手足を真っ赤にはらしているあなたを見たら、わたしの心痛は倍加したことでしょ。こんな状況でもわたしは大丈夫です。あまり苦痛には感じていません。ただ手足が悴^{かじか}んで、口数が少なくなるだけのことです。でも、あなたがベルギーで一冬過ごすということになったら、きっと病気になってしまおうでしょう。でもこのところ、ようやく暖かくなってきましたので、ここにいてくれたらと思ったりします。でも、これまで無理強いをしたことはありませんし、これからもそんなつもりはありません。いろいろ不自由なこと、屈辱的なことを我慢しなければなりませんし、生活は変化に乏しく単調で、特に多くの人々のなかに在りながら、たえず孤独感がつきまといまいます。新教徒と異邦人は、教師であれ生徒であれ、孤独であることに変わりはありません。自分の境遇に文句を言っているわけではないのです。不満がまったくないというわけではありませんが、はたして満足のいく職業などあるのでしょうか。今の自分とかつての自分——ここでの自分の地位とシジウィック夫人

あるいはホワイト夫人の家庭での立場——とを比べて見て、わたしはいつも感謝の気持ちに満たされます。

先日のお便りのなかに、一瞬、わたしの怒りを掻き立てる憶測がありました。はじめは相手にするのも馬鹿げていると思い、放って置くつもりでしたが、やはり思い直し、今回にかぎって答えることにしました。「ブロンテ嬢の将来のお相手は大陸にいると考えている」人たちが「3、4人はいる」らしいという^{くだり}件です。そういう人たちはわたしより頭がよくて、彼らにはわたしが海をわたった理由が、単なる一教師としてエジェ夫人のところに戻るためとは到底信じられないのでしょう。イギリスで50ポンドの職があるにもかかわらず、わずか16ポンドのベルギー行きを選ぶには、エジェ夫妻を敬愛し、そのご親切に報いたいというだけでは不十分で、もっとほかに何か強い動機がなければならぬというわけなのです。つまりやがて夫を獲得する見込みが、どうやら——どこかに——あるに違いないということになるのです。こうしたお情け深いお歴々が、わたしの送っている隠者のような暮らし——エジェ氏以外の男性とは一言も言葉を交わさず、しかもその彼ともごく稀にしか話さない——ことを知ったら、そんな愚にもつかない考えがわたしの行動に何らかの影響を与えた、などと勘ぐるのは止めるでしょう。そんな馬鹿げた批判を退けるには、これだけ言えば足りるでしょうか。

結婚する——あるいは結婚を望む——こと自体を罪だと言うつもりはありません。けれどわたしが唾棄したいのは——財産もなく容姿にも恵まれない女が——ひたすら結婚に憧れ、それを人生の目標とすること——自分たちの魅力のなさを認識することもなく——口をつぐんで結婚以外のことを考えた方が身のためだ、ということが自覚できない——まさに、そうした愚かさなのです。

ブルックロイドの皆さまのご無事を心から祈ります——お母さまとマーシーによろしく。アン²⁾から便りがありましたか。

さようなら、すぐにお便りください。すてきな愉快なお便りをお待ちしています。どうかつまらない噂でわたしを悲しませないでください。

- 1) メアリはドイツで英語を教える一方、音楽や代数を勉強していた。
- 2) エレン・ナッシーのおば。

ブランウェル・ブロンテ宛1843年5月1日

ブリュッセル

愛するブランウェル

お便りをくれたそうですね。けれど例によってわたしのもとには届きませんでした。残念です。あなたの様子を知りたかっただけになおさらです³⁾。きちんと住所を書いて、イギリスの郵便切手を1シリング6ペンス分、貼ってくれたのでしょうか。そうしないと絶対に転送してくれません。数日前、お父さまからお便りがありました。家ではどうやら順調なようですね。ただエミリが独りぼっちなのが気がかりです。でも、それも間もなくあなたとアンが休暇で帰省すれば賑やかになるでしょう。調子はいかがですか。アンは元気になっていますか。お父さまがいらしたと聞きました²⁾。ご機嫌はいかがでしたか。手紙をくれるときは、忘れずにこれらのことを知らせてください。それから生徒さんたちや、家族のほかの方々とはうまくいっていますか。詳しく書いてください。あなたが一

生懸命やっついて評判のよいことは聞いていますが、詳しいことを知りたいのです。

こちらは元気で何とか頑張っています。けれどひどい人間ざらいになり、自分でも気むずかしくなりつつあることに気づかされます。あなたに言わせれば、特に珍しくもない、それどころか、このわたしが——優しさ溢れる博愛の——人だったことなどあったかと言うでしょう。ダス・イスト・ヴァール（「ほんとうです」という意味）ですね。でも実際、ここの人々にはおよそ覇気が感じられません。学校には昼間は120人も人間の出入りしますが、その中で目をひく人はほんの1人か2人しかいません。これはなにもわたしが愚かな選り好みをしているからではなくて、かれらに立派なところがないからなのです。知性もなければ礼儀も知らず、優しさもなく、感情もないのです。わたしは憎みもしません——憎むに値しないのです。彼女たちには心がなく、人に訴えるところがありません。それでも来る日も来る日も、無関心なまま、何にも恐れず、何も好くことも憎むこともなく、何ものにもならず、何事もせずに日々を送るのも退屈なものです。確かに授業をし、時に彼女たちのあまりの無知にかっとして頭に血がのぼるようなこともあります。でも怒鳴ったり、激情に駆られたりしているなんて思わないでください。感情的になって、ロウ・ヘッドの時のように声をあげようものなら³⁾、頭がおかしいのではと疑われることでしょう。こちらではだれもカッとなる人などいません。そんなことはかれらには無縁なことなのです。かれらの血を澱ませる粘液が重すぎて、血が沸き立つことなどありえません。たがいの関係は虚偽そのもので、そのくせ言い争うことはめったにありません。友情などという間違いは、彼らにはおよそ無縁なものです。この原則に対してただ一人例外なのは、黒鳥のエジェ氏のみです（夫人はいつも冷静で理性を失うことはありませんから、あまり例外的な人物とは言えません）。でも今ではそのエジェ氏ともめったに話しません。もはや生徒でない以上、彼とはほとんどというか、ぜんぜん関係がないのですから。ときおり本を貸してくださるなど親切にしてください。わたしの喜びと楽しみのすべては、なお氏に負っているということになるでしょうか。人との付き合いがないことを除けば、何も不満はありません。仕事も多すぎることはなく、自由時間はたっぷりあり、人の干渉を受けることはほとんどありません。気楽な、変化のない、静かな生活です。シジウィック夫人の家でのことを思えば、感謝しなければなりません。どうかすぐにお便りください。そしてアンにも手紙を同封するよう伝えてください。そんな親切がわたしにとって、どんなに救いになることでしょう。思いつく限りのことを書いてください。

夕暮れに、白いカーテンを巡らした寝台が並んでいるだけのだだっ広い宿舎にひとり佇んでいると、奇妙にもあの瞑界の思い出や懐かしい顔々や情景が⁴⁾、物狂おしいばかりに胸を行き交います。

アンによるしく。

かしこ

愛するアン

お手紙ください。

愛する姉より。

C・B

たった今、エジェ氏がいらしてドイツ語版の聖書をくださいました。意外です。もう何日も声をかけてくださらなかったのに。

1) ブランウェルはアンの紹介で、彼女が家庭教師をしていたソーパ・グリーンンのロビンソン家の長男の家

庭教師に採用され、1843年1月から同家に住んでいた。

- 2) プロンテ師はヨークでの巡回裁判に証人として出廷した際に、ソープ・グリーンまで足を伸ばしたと思われる。
- 3) 1836年10月(?) 付けエレン宛の'Weary with a day's hard work'で始まる書簡を参照。
- 4) プランヴェルとシャーロットが10年あまりに渡って共同で創作していた<アングリア物語>のことを指している。

エミリからエレン宛 [1843年5月22日?]

[ハワース]

親愛なるミス・エレン

「郵便料金無料」の手紙を送る機会を教えてくださいまして、ありがとうございました。お礼を申し上げなければ、とんでもない礼儀知らずになってしまいます。

「来週の火曜日」というのが明日のことで、たとえテイラーさん¹⁾にお持ちいただくには遅過ぎるとしても、ご指示通り手紙を書きました。

シャーロットは、帰宅については一言も触れておりません。あなたが半年ほどあちらにいらっしゃるのなら、一緒に姉を連れ帰ることができるかもしれません。そうでもしなければ、姉は航海に立ち向かう勇気が出ないという理由だけで、メトセラ²⁾の歳になるまで彼の地で暮らすことになるでしょう。

こちらでは皆、息災です。最近の手紙ではアンも元気です。1, 2週間すれば休暇でこちらに戻りますので、あなたにきちんとした便りを書いてもらいます。そんなことはわたしにはまったく出来ない芸当です。

愛をこめて。お元気で。

EJプロンテ

- 1) ジョー・テイラーのことか。
- 2) 旧約聖書「創世記」5章27節。ノアの洪水以前の族長で、969歳まで生きた。一般に長命者を指す。

エミリ・J・プロンテ宛1843年5月29日

ブリュッセル

E・Jへ

身勝手なお金の無心をする理由は、お父さまへのお便りに書きました。信じられますか。ミュール嬢ときたら、こちらはひとりなのに2人分の月謝つまり月額10フランも要求するのです。毎月5フランの洗濯屋への支払いと合わせると、年収16ポンドの身には大恐慌をきたします。またドイツ語を始めたことはお気づきでしょう。こちらはさしたる変化もありません。目下ブランシュ嬢とオセ嬢が情け容赦のない戦いを繰り広げているところです。二人はまるで二匹の猫のようにいがみ合っています。オセ嬢はブランシュ嬢の痾癩に恐れをなしています(ふたりは意地の悪い口げんかをするのです)。オセ嬢によれば、ブランシュ嬢は怒ると「唇がなくなる」³⁾そうです。ソフィ嬢もブランシュ嬢をひどく嫌っていることが分かりました。ブランシュ嬢のことを情知らずで嘘つきで

執念深いと言っていますが、その言葉がぴったりです。それに彼女は明らかにエジェ夫人のスパイで——何から何まで夫人に報告している——ことがわかりました²⁾。作り話までするのです。思いも寄りませんでした。

今では英語の授業をすべて任されています。初級クラスの授業をふたつしてきたところですが。こんな時のオーテンスはまるで絵に描いたようで、その顔ときたら「額が曇って今にも雷雨が来そうな」³⁾ほど暗く、耳ときたら血の滴る牛肉のように真っ赤になります。どんな質問をしても「わかりません」としか答えられません。こんな悪魔払いの力を備えた人間に会えるのが、彼女の友人だけというのは残念なことです。こうした点では、わたしも仲間にも不自由しません。近頃ではエジェ夫妻はめったに話しかけてくださりません。ここでは他の人間たちのことなど、わたしは気にかけている振りさえしません。こう言えば、わたしがエジェ夫人に親愛の情を持っているなどとは思わないでしょう。彼女がわたしのことを好きでないという確信があります。なぜなのか、わかりません。夫人自身もわたしを嫌うべきははっきりとした理由はわかっていないのではないかと思います。でもひとつには、彼女はなぜわたしがブランシュやソフィやオセと仲良くできないのか、理解できないのです。夫人にすばらしく従順なエジェ氏⁴⁾が、社交性に乏しく可愛気のないわたしを気に入らないとしても、それは不思議ではありません。あまねく「人を愛さねばならない」ことについて、彼からお説教を受けましたが、わたしが特に改めた様子もないのを知って、どうやらわたしのような人間には構わないで、間違っただまにさせておくのがよいと、お決めになったようです。その結果、彼はますます顔を見せなくなり、わたしは来る日も来る日もロビンソン・クルーソーのような境遇——まったくの孤独の中に置かれています。でも、どうということはありません。ほかの点では取り立てて不満はありませんし、このことすら不満の種にはなりません。エジェ氏の好意が失われた（もしわたしがそれを無くしたとして）ことを除けば、わたしには何もかもどうでもいいのです。あなたが元気なことを祈ります。荒野を散歩してください。ハナが辞めて、おまけに小さな妹をあなたに押しつけて行ったことを聞いて胸が痛みます。タビーがそのまま残ってくれるとよいのですが——よろしく言ってください。戦いを続ける紳士たち⁵⁾に、そして相変わらずの喘息にもよろしく。

C・B

ブランウェルにも手紙を書きました。彼からは無しのつぶてですが。

- 1) 原文はフランス語。『ヴィレット』第14章でルーシー・スノウがサン・ピエール嬢のことを、唇が薄く「糸のよう」と書いている。
- 2) 『ヴィレット』第8章には、マダム・ベックがスパイを使って寄宿学校を維持していたと書かれている。
- 3) 『ジェイン・エア』第24章に、ロチェスターについて同じ表現が使われている。
- 4) エジェ夫人は夫に対するシャーロットの態度に不審を感じ始めている。『ヴィレット』第38章で、マダム・ベックはルーシーとポールを仲を裂こうとする。
- 5) エミリとアンが書き続けていた〈ゴンドル物語〉の登場人物に言及していると思われる。

ブロンテ牧師宛〔1843年6月2日?〕

〔ブリュッセル〕

家からの便りをとても嬉しく思いました。何も知らせが届かないので心配になり、何か困ったことでも起こっているのではないかと、漠然とした不安を感じ始めていたところです。お父さまはご自分のお身体のことは何もおっしゃいませんが、お変わりないことを祈ります。またエミリも元気でありますように。ハナがいない今では、辛い仕事がたくさん彼女に降りかかっているのではないのでしょうか。まだタビーを置いてくださると聞いて、本当に喜んでます。彼女には大変な慈悲であり、それは必ず報われるものと思います。なぜならタビーは本当に誠実で、機会があれば力をふり絞って仕えてくれるでしょう。それにエミリのよい相手になってくれるでしょう。タビーがいなかったら、あの娘は寂しくてたまらないでしょう……¹⁾

1) この続きは、ドイツ語のレッスンを受けるための費用が必要なことを書いていたと思われる。前出の手紙を参照。

友へ1843年6月5日 (ドイツ語作文)

ブリュッセル6月5日

親愛なる友へ

わたしがベルギーに戻ったことは、きっと聞いておられることでしょう。生まれ故郷を去ることは苦痛でしたが、おわかりのように、人は金持ちでなければ家に留まることは必ずしも叶いません。運命が授けてくれなかった自活というものを勝ち取るには、外に出て勤勉に懸命に努力しなければならないのです。両親から引き離される時、人はしばしば大変な苦しみをおぼえます。自分の家庭に見出すような愛情や喜びを、他人の中には見出せないからです。しかし、わたしはとても親切にしてくださる婦人と暮らせる大変な幸運に恵まれています¹⁾。

日曜日でも月曜日でも休日でした。日曜日にはオセ嬢と3人の生徒たちと散歩に出かけました²⁾。郊外でピクニックをして、〈緑の小径〉³⁾を通過して夕方に帰宅しました。そこには馬車がたくさん停まっています、着飾った紳士淑女が群れ集っていました。風邪を引いたので、月曜日には出かけませんでした。

今日はまた学校です。わたし達はみんな仕事を始めなければならないので、もう手紙を書く時間はありません。

親愛なる友

C・ブロンテ

- 1) シャーロットはエジェ夫人に対する本当の気持ちは控えていると思われる。
- 2) 『ヴィレット』第33章参照。
- 3) ウィルブローク運河に近い有名な小径。『教授』第19章参照。

〔1843年6月末？〕

〔ブリュッセル〕

愛するエレン

あなたは何て粘り強いのでしょうか。自分は絶対正しいと確信しているなら、その粘り強さも結構でしょう——でもその前にしっかり確信できなければいけません¹⁾。アンお姉さまがお帰りになって良かったですね。よろしく伝えてください。わたしの知る限りでは、ジョー・テイラーはとても元気そうです。でもあの家族はいつも血色がいいのです。ハンズワース²⁾に行くのをそんなにためらうなんて、おばかさん。出かけて行って、恥ずかしがらずにジョー・テイラーが好きですと言いなさい。彼は好意と称賛に値する人です。そういう男性は滅多にいないのですよ。激しい恋をするというのは別としても。でも、あなたに限って、そんな恋の深みにはまるということは、まずないように思います。わたしはこちらでは何とかやっています。でもメアリ・ディクソンがブリュッセルにいなかった今となっては、話をする相手がいません³⁾。ベルギー人など数に入れていませんから。時々わたしは何時までここにいるのだろうと自問します。でも今のところはその問いかけをするだけで、答えは出していません。でも充分なドイツ語が身に着いたら、荷物をまとめて出立ようと思います。望郷の思いにときおり激しく胸を突かれます。

わたしは（鉛筆を使いましょう——ペンの具合が悪くて）、メアリ・テイラーのようなやり方はしません。あなたは無条件に認めています、わたしには賛成できません。精力的で活発な精神の持ち主であること、勇気があって独立心が強く、才能のあることを示してはいますが、分別あるやり方とは言えません。メアリのような天才は得てして、分別など関係なくあらゆる障害を越えてしまうものです。彼女も成功するかもしれませんが、これまでのところうまく行っています。でも慣習に反した彼女の行動に対する反対意見も非常に強いものがあります。彼女に対する風当たりの強さをわたしは心配するのです。生徒たちが女の子なら、それもよかったです。でも男の子とか‘若い男性’であることが障害です。この意見はあなただけの胸にしまっておいてください。

あなたが送ってくださったヘンリの肖像は確かに似ていますが、取っておくほどの出来ではありません。伝道師になるという彼の思いつきは面白いです⁴⁾。伝道師たちが必要とされているような国々の気候では、彼は1年と保たないでしょう。

あなたのお家の方はどなたもあまり丈夫とは言えません。それどころか、皆さん華奢で、なかでもヘンリは特に弱いのですから。

今日は陰気な空模様です。ひどい風邪をひき、頭痛がして冴えません。愛するエレン、何もお話しすべきことはありません。ここでは毎日が似たようなものです。田舎にお住いのあなたには、ブリュッセルのような華やかな大都会の真ん中で、人生が退屈だなんて信じられないでしょう。でもそうなのです。とくに休日には。生徒も先生もみんな知人を訪ね、5時間も6時間も人っ子ひとりなく、がらんとした大教室を4つとも思いのままに使えるといったことが時々あります。本でも読もうか、手紙でも書こうかと思いますが、だめなのです。それで部屋から部屋へと歩き回ってみますが、家中の静けさと寂しさが鉛のように心を重く圧します。こんなとき、エジェ夫人は（優しい良い方だとこれまで書いてきましたが）わたしには近寄ろうともしないと言っても、あなたは本気にしないでしょう。彼女は冷静で分別のある方です。でも心の冷ややかなことは、オールバット夫人とさして変わりません。正直なところ、このように放っておかれた時、初めは驚きました。ほかの人たちは誰もが友人たちとお祭りで浮かれているのに、わたしが独りぼっちであることを知りながら、彼女はまったく気を使ってくれませんでした。でも夫人はわたしのことを他人に対しては誉

めそやし、良い授業をすと言っているのです。わたしに対しては、ほかの先生に対するほど冷やかではありません。でもあの人たちはわたしほど夫人を頼りにしているわけではありません。ブリュッセルに親戚や知人がいるのですから。

わたしがイギリスにいた時に夫人から届いた手紙を覚えているでしょう⁶⁾。何とも優しく思いやり溢れる手紙でした。それが、おかしいと思いませんか？ この豹変ぶり、よそよそしさの理由がわかりかけてきたような気がします⁷⁾。それを思うと吹き出したいような、泣き出したいような気持ちです。確信したら、お話します。それまではあなたひとりの胸に取めておいてください。それだけが、わずかな気晴らしなのです。ほかの点では、今の立場に何の不満もありません。わたしのことを尋ねる人たち（もしいたらの話ですが）には、そう伝えていただいて結構です。愛するエレン、できるだけお便りください。お手紙をくださるのは功德というものです。悩める魂に安らぎを与えることになるのですから。さようなら——お母さま、お姉さまたちによろしく。

- 1) エレンは家庭教師になって家を出る考えを再燃させたと思われる。
- 2) ジョン及びジョー・テイラーは工場に隣接する家に住んでいた。
- 3) メアリ・ディクソンと兄（弟）エイブラムは健康上の理由でドイツを旅行していた。
- 4) 異例なことにメアリがドイツの少年たちに英語を教えて生活費を稼ぐ決心をしたことが、イギリス人の知人たちの間で物議を醸した。
- 5) ヘンリはかつて伝道師になることを1830年6月25日の日記に記していたが、その後、頭部のけがで断念した。38年にバートン・アグネスで行われた伝道師集會に出席し感動したが、伝道師になることはなく、その後44年にはダービシャーのハザセッジに赴任した。
- 6) この手紙は残存していない。
- 7) エジェ夫人は夫に対するシャーロットの恋情に気づいていたと思われる。

1843年8月6日

ブリュッセル

愛するエレン

あなたからは一向にお返事が来ませんでした。でも許すことはキリストの教えの一つですし、またイギリスに手紙を届けていただけるせっかくの機会でもありますので、怒らずに重ねてお便りいたします。わたしが愚痴をこぼしても、どうか哀れに思っ叱らないでください。気分が沈んで、今は天も地も陰鬱に虚ろに映ります。まもなく休暇が始まります¹⁾。誰もがそれを楽しみにし、浮き浮きとはずんでいます。家に帰れるからです。5週間もの休暇の間、わたしはずっとここに居ることになるでしょう。そしてその間じゅう一人ぼっちになるでしょう。やがて気がふさぎ、夜も昼も耐えがたいほど長く感じられるのです。生まれて初めて休暇に不安を感じています。先週土曜の午後のことですが、ブリュッセルのロワヤール教会²⁾にいたところ、説教壇から声が聞こえたように思い驚きました。その声に、バーストールとパトリーの情景が心の中にさっと浮かび上がりました。眼には見えませんでした。教会の人ではなくあの小柄なジェンキンスさんがそこにいらしたような気がしました。あなたの手紙が来るかと心待ちにしていました。でも来ないところを見ると、たぶんわたしの錯覚だったのでしょう。

ああ、筆が進みません。どうにも気が滅入ります。矢も楯もたまらず帰りたいのです。まるで子

供ですね。お許してください、どうしようもありません。けれど、たとえ明るく耐えていく元気はなくても、まだなんとか挫けずにやれるでしょう。まだ数カ月（神が許せば）いて、ドイツ語をものにした上で、皆に会いたいと思います。休暇なんてさっさと終わってくれたらよいのに！なんともろいのです。キリスト教徒の慈悲を持って、どうか長いお便りをください。できるだけ細かく詳しく。何でも書いて欲しいのです。何を読んでも心安まります。ベルギーを離れたいからといって、それは人々が親切でないからと言うものではありません。そうした問題ではないのです。皆、とても礼儀正しいです。それでも、忍びよる望郷の思いはどうしようもありません。わたしのことをお叱りになろうと、このつまらない情けない手紙を何と思おうと構いません。お返事をくれていたら、もっと書こうという気にもなれたかも知れません。でも返事がないので、わたしには書けません。お母さま、マーシーによろしく。

陽気で活発で愉快的な友より。

C・B

ここまで書いていたとき、ジェンキズさんが来られました。あなたからのお便りはお持ちではありませんでしたが、あなたがハロゲイト³⁾にいたことを知らせてくれました。あなたが送るつもりでいたという手紙は見つからなかったそうです。悲しい出来事を二つ知らされました。かわいそうなセアラ⁴⁾。最後にさようならを言ったときには、まさかこれっきりになるなどは夢にも思いませんでした。でもきつとあちらで楽しくしていることでしょう——この世にいた時よりもずっと幸せに。はじめの喪が明けたとき、その死を嘆くよりもむしろ喜ぶべきことがおわかりになるでしょう。お母さまにはさぞお辛いことでしょう——あなたにも。ハロゲイトにいらっしやるというのは、あなた自身のぐあいがよくないのではと心配です。すぐにお便りください。

- 1) 『ヴィレット』第15章。ルーシー・スノウは誰もいない寄宿舎で孤独にさいなまれる。
- 2) ブリュッセルのプロテスタント教会。
- 3) イングランド北部の有名な温泉保養地
- 4) シャーロットは悲しい出来事の一つしか書いていない。ナッシーのSarah Walker Nussey (1809-43) は、長らく病気がちであったが、小腸の腫瘍のため6月16日に死亡した。

エミリ・J・ブロンテ宛1843年9月2日

ブリュッセル

愛するE・J

お便りする機会がまたありそうなので、せっかくですから2、3行したためます。休暇も半分あまりが過ぎ、思いのほか順調です。この2週間は好天続きで、といっても昨年のようなアジア的な猛暑というわけではありません。それであちこち歩き回り、ブリュッセルの通りの探索に努めました。今週はパリから戻ってきたブランシュがいるだけで、ほかの教師は誰もいないので、食事のとき以外はいつも一人です。あの嘘つきで卑劣なブランシュとは、とうてい付き合う気にはなれません。向こうも嫌われているのはわかっているので、今では話しかけてもきません——ほっとします。

でも話し相手もなく、いつもここに独りで閉じこもってばかりでは、決まって気鬱に取りつかれ

ますから、外出して何時間も並木道や通りを足の向くままに歩き回ります。昨日はお墓参りをし、さらにその向こうにある丘に登って見ました。そこからは地平線までずっと野原が広がっていました。帰った時にはもう夕暮れでしたが、それでも何の楽しみもない家に帰る気にはなれず、イザベル通り界限をぶらつきました。ふと気がつくときサン・ギュデール教会²⁾の前に来ていました。あなたも知っている、あの教会の鐘が夕べの祈りの刻限を告げていました。まったく一人で扉をくぐり(わたしらしくもないと言うでしょう) 2, 3人の老婆がお祈りをしている側廊を巡るうちに、晩禱が始まりました。終るまで残っていました。それでもなお教会から出る気になれず、というか、どうにも家——学校のことですが——に足が向かないのです。すると奇妙な考えが浮かびました³⁾。大聖堂の片隅には、まだ6, 7人が告解室のそばにひざまづいていました。二つの告解室に司祭さまの姿が見えました。悪いことでないかぎり何をしてよいのではと言う気がし、また一時の慰めになるかもしれないと思ったのです。カトリック教徒に転向して、本物の告白をし、それがどんなものかひとつ試してみようと、ふと思ったのです。わたしを知るあなたには、これはいかにも奇妙に映るでしょう。でも人は独りでいると奇妙なことを思い着くものなのです。一人が告白をしています。司祭の席というか小部屋のような所には入らず、きざはしに膝をついて、格子窓越しに告白するのです。聴罪司祭も悔悟者も囁くような声で話すので、ほとんど声は聞こえません。2人、3人と立ち上がって帰って来るのを見届け、最後にわたしも近付いてゆき、空いたばかりのくぼみに膝をつきました。そのままの姿勢で20分ほど待たなければなりません。こちらからは見えませんが、向こう側に別の悔悟者がいるのです。ついにその人も去り、格子窓の内側にある小さな木の窓が開いて、司祭の耳がこちらに向けられるのが見えました。始めなければなりません、わたしはその際の決まり文句を一言も知らないのです。奇妙な具合になりました。真夜中にテムズ川で一人ぼっちになった時と同じような気持ちでした⁴⁾。自分は異邦人でプロテスタントとして育てられたことを告げることから始めました。それではあなたはプロテスタントなのですか、と司祭さまがお尋ねになりました。嘘をつくわけにはいきませんので、「はい」と答えました。それでは「祝福を授ける」わけには参りませんと言われました。しかし何としても告白をしたいと申し上げると、ついに司祭はそれでは許しましょう、それが本当の教会に戻るきっかけになるかも知れないのでとおっしゃいました。わたしは告白を——本物の告白をしたのです⁵⁾。それが済むと、司祭は住所を知らせ、毎日パルク通り——住いのある所です——に来るようにとお命じになりました。わたしに^{ことわり}理を説き、プロテスタントであることの誤りと非道を悟らせようというのです!!!わたしは仰せの通りに致しますと約束しました。もちろん冒険はそこまです。あの司祭さまに二度と会わなければよいのですが。このことはお父さまには内緒にしておいた方がよいでしょう。ただの気まぐれとは受け取らず、わたしがカトリックに転向しようとしているとお思いになるでしょうから。あなたもお父さまも、そしてタビーと〔ホイルズさんたち〕も皆お変わりないものと思います。すぐにお便りください。

かしこ

C・B

- 1) マーサ・テイラーが1842年10月に埋葬されたプロテスタントの墓地。
- 2) 1226年設立のカトリック教会。エジェ寄宿学校のあったイザベル通りは、この教会へ行くための近道として作られた。
- 3) 『ヴィレット』15章では、この時の経験が使われている。
- 4) 『ヴィレット』6章参照。

5) 伝記研究家ジェランは、この時シャーロットはエジェ氏への恋情を告白したと推測しているが、手紙では不明。『ヴィレット』の告白の場面では、罪とは書かれていない。

エミリ・J・ブロンテ宛1843年10月1日

[ブリュッセル]

日曜日の朝、皆は「ミサ」のため偶像崇拜の真っ最中で、わたしはここ、つまり食堂にいます。ここが我が家の食堂、でなければ台所、いえ勝手口であつたら、どんなにいいでしょう。肉を細切れにしているところでも構いません。もうひとつのテーブルには牧師補さんや教区係の人たちが着いて、あなたはわたしのそばに立って、小麦粉は十分か、胡椒は多すぎないか、特にマトンの脚のいちばん美味しい部分をタイガーとキーパーに取り分けたか、見張っているのです。前者は皿や肉きり包丁の回りを飛び回り、後者は台所の床からまるで火柱みたいに立ち上がっているのです。この絵の仕上げには、じゃがいもを糊になるほど茹で上げようと、火をふうふう吹いているタビーの姿がなければ！こんな思い出が今のわたしには、何と神々しく見えることでしょう！しかし今は帰国する考えはありません。口実が見つかりません。なるほどここは気が滅入ります。でもだからと言って、帰って何をするという当てもないのに帰るわけにはいきません。勤め口を言っているのではありません。それでは大難を逃れて小難に入るようなものです。あなたが自分のことを怠け者だなんて！とんでもありません、馬鹿げています！……お父さまはお元気ですか。あなたはいかがですか。タビーは。ヴィクトリア女王のブリュッセルご訪問についてお尋ねでしたね¹⁾。兵隊に囲まれた六頭立ての馬車がロワイヤル通りを疾走していく姿が一瞬見えました。笑顔でお話なさっていました。ふくよかでお元気そうな方で、服装は地味で、あまり威厳がないというか、気取らないご婦人のように見えました。ベルギー人は総じて好感を持ったようです。いつも礼拝堂のように陰気なレオポルド国王の宮廷²⁾が、おかげで賑やかになると言っていました。またすぐにお便りください。お父さまが本当にわたしの帰国を心から望んでいらっしゃるのか、またあなたも同じ気持ちなのか、お知らせください。帰っても自分がなんの役にも立たない——教区の世話になる年寄りのように——のではないかと思います。ハワースが、中でもネズミ色した我が家が無事でありますように。神のご加護を祈ります。あなたとお父さま、そしてタビーが元気で健やかで幸せで豊かでありますように。

1) 1831年にベルギー国王となったレオポルド1世(1790—1865)は、ヴィクトリア女王の叔父。ヴィクトリア女王夫妻は1843年9月15日から20日まで同国を訪問した。

2) ベルギー国王妃マリー・ルイズは弟(兄)オルレアン公爵の死(1842年7月)を悼み、そのためこの年のヴィクトリア女王夫妻の訪問は取り止めになっていた。

1843年10月13日

ブリュッセル

愛するエレン

お便りいただいて嬉しかったです。けれどそれを読んだ時——胸が痛みました。お姉さまが亡くなられてまだ間もないというのに、お兄さまが重病²⁾という知らせで遠方まで駆け付けねばなら

ず、ようやく帰宅すれば、今度はアンお姉さまが病気だなんて。昨日メアリ・ディクソンから届いた手紙では、アンの方は良くなっているようですが、ジョージは回復が難しいとありました。本当なのでしょうかね———そうでないことを願っています———本人、そしてあなたのために。ジョージを失うことは、お母さまやお姉さまたちにもなんという打撃でしょう。その日が一日でも先になるよう願うばかりです。愛するエレン、どうかまたすぐお便りください。ブルックロイドの様子を知らせて欲しいのです。お宅のことが気がかりでなりません。皆さまはわたしの最も古くからの、そして最も心優しい友人たちなのですから。試練の時間が間もなく過ぎ去ることを信じています。長い長い試練でした。

メアリ・テイラーは当然ですが、元気にしています。たまに手紙が届きます⁹⁾。彼女とあなたからの便りだけが、わたしの数少ない楽しみの一つなのです。メアリはわたしにブリュッセルを離れ、彼女のところに来てはと、しきりに勧めます。そうしたい気持ちは山々ですが、それは許されないような気がします。確実なものを捨て、不確実なものを選ぶわけですから、無分別この上ないということになりましょう。

ブリュッセルは確かに今のわたしには寂しいところです———メアリ・ディクソンが帰国してからというもの、友人など一人もいません。確かにドクター・ウィールライトのお家の方々にはとても親切にいただきましたが、彼らは八月の後半にお帰りにになりました。今やわたしは本当にひとりぼっちになりました。ベルギー人なんて数に入りません。エジェ夫人は外面が良くて、そつがなく抜目のない方です。わたしはもう、あの方を信じません。大勢の中にいながらこんなに寂しいなんて、何とも奇妙です。時にあまりの寂しさに———先日はもう耐えられない気がして———エジェ夫人のところに行き、辞職の希望を伝えました。夫人の一存で決められるのであれば、おそらく今ごろわたしは自由の身になっていたでしょう。ところが騒ぎを聞いたエジェ氏が、翌日わたしを呼びつけ、断じて帰ってはならないと言いつ渡したのです。なお言い張れば、きっと激昂なさると思い、もうしばらくいることをお約束しました。しばらくがどれくらいになるか、わかりません。でも何をする当てもなく、帰国するわけにもいきません———いい年をして。でも、そろそろ学校を始める時期だという話があれば、喜んで受けたいと思います。

エレン、お話ししたいことがたくさんあります。おかしな不思議なことが山ほど。とても手紙に書くわけにはいきませんが、いつか夜にでも、ハワースかブルックロイドで炉格子に足を載せ、髪を巻いたりしながら———そんな時がまたあったら———お話しできるかもしれません。

こちらはまだ火を入れず、寒くてたまりません。それ以外は元気です。この手紙はジョージ・ディクソンがイギリスまで届けてくださるはずですが。可愛い顔立ちの感じのよい青年です。何だか背骨が一本抜けているような気もしますが———肉体的な欠陥を言っているのではありません———それは問題ありません———彼の性格がと言う意味です。

愛するエレン、さようなら。この手紙がお手元に届く頃には、ジョージが体力を回復しているとよいのですが。彼は過酷な試練に晒されてきました。アンもすっかり良くなっていますように。お母さまやお姉さまたち、そしてジョージによろしく。

愛するエレン、あなたのお望みが叶いますように。

CB

- 1) エレンの姉セアラ・ナッシーの病死のこと。1843年8月6日付けエレン宛書簡参照。
- 2) 精神疾患を患っていた兄ジョージ・ナッシーの病状が悪化していた。
- 3) シャーロット宛のメアリの手紙は残っていないが、エレン宛に1843年6月25日から冬にかけて書かれた

手紙は残存している。それらは彼女がドイツで週48時間も英語を教え、十分な生活費を得ていることを伝えていた。

メアリ・ディクソン宛1843年10月16日

ブリュッセル

拝啓ミス・ディクソン

今頃はもう、わたしのことなどお忘れかと思えます。ブリュッセルを後にされてから、たくさんの目新しい風景や人々にお会いになったことでしょうか。わたしの方は独りぼっちで、あなたのことをそうすぐには忘れられそうにありません。ベルギー人たちにウンザリすると、あなたのことを思い出して気持ちを入れ替えます。

水治療¹⁾の効果がなく、まだ健康がすぐれないと伺って悲しく思います。わたしは本当に効果があるものと信じていたのです。というのも、本質的には気力の問題——あなたに欠けているのは主として体力だと思えます——に違いないので、イルキー²⁾の水と空気をもっと効果を発揮するだろうと期待していたのです。長らく健康がすぐれない状態ですが——希望を持って生きてください——本当は病気ではなくて、あなたの場合は年齢³⁾よりも成長が遅れているということなのでしょう。養生すればきっと健康が戻って来ることでしょうか。辛い治療など不要です。

時々メアリから便りがあります。あなたにも届いているでしょう。彼女は現在の職場に満足して楽しんでいると言っています。生徒の人数は増える一方で、そのため彼女は授業料を値上げしました。

彼女はわたしに来よう言います。わたしがブリュッセルでとても寂しい思いをしていることを知っているからです。そしていかにも彼女らしい無欲な寛大さで、彼女と一緒に授業をしないかと誘ってくれたのです！

けれど、もちろん、わたしにはこの好意に甘えることはできません。

ナッシー家の試練は本当に厳しいものがあります。気の毒なジョージは、特に苦しみを受けるべく運命づけられているように思えます。彼自身のためにも、またご家族のためにも、彼に関する不安が根拠のないものと判明するよう願っています。彼にもしものことがあれば、彼らを結束させてきた絆が断たれ、積み上げた薪の束はきっとバラバラになってしまうでしょう。数日前にエレンから手紙が届きました。それには彼が回復する見込みがあると書かれていました⁴⁾。

先日、とても気分が落ち込んで——今ではしばしばそうなるのですが——とても人恋しい気分になりましたので、二階に上がって、しまっておいたトランクの底からあなたの肖像画を取り出しました。あなたとウィリアム・ヘンリ⁵⁾は似ていないと言っていましたが、わたしはある肖像画を見つけて慰められました。もう少しほっそりして青白かったら、本当によく似ているでしょう……

エレン・テイラー⁶⁾がブリュッセルに来る見込みは今はありません。わたしはあとどれくらいここにいることになるでしょう。自分でもわかりません。たぶん春くらいまででしょうか……

ミス・ディクソン、こちらにいらした頃は本当に優しくしていただいていたありがとうございます。わたしの手紙は短いものですが、これ以上長々と書く必要はありません。あなたがお読みになって面白そうなのは、もう何も書けませんので。

かしこ

C・ブロンテ

- 1) Vincenz Priessnitz (1801—51) によって開発された治療法で、水を内用および服用して病気を治療するもの。ヨーロッパで広く行われ、1840年代にイギリスにも導入された。
- 2) リーズの16マイル北西にあるワーフ川のほとりの小さな町。1843年に水治療の最初の診療所が設立された。
- 3) Mary Dixon (1810—97) は当時33歳だった。
- 4) ジョージ・ナッシーは肉体的には快復したものの、1845年から死亡する1885年までヨークの施設の精神病院で治療を受けていた。
- 5) William Henry Taylor (1828—99) のこと。彼の父William Taylor (1777—1837) は、メアリ・テイラーの父Joshua Taylor (1766—1840) の弟で、メアリ・ディクソンの母Laetitia (1780—1842) の兄であった。両親が死亡したため、ウィリアム・ヘンリ・テイラーは叔父エイブラム・ディクソンのブリュッセルの家にしばらく同居していた。
- 6) 上記のウィリアム・ヘンリ・テイラーの姉Ellen Taylor (1826—51)。

エミリ・J・ブロンテ宛1843年12月19日

ブリュッセル

拝啓E・J

決心しました。新年の翌日には家に帰っていたいと思います¹⁾。エジェ夫人にも話しました。しかし帰るためには、もう5ポンドお願いしなければなりません。現在3ポンドしか持ち合わせがなく、ブリュッセルを去る前にいくつか買っておきたいものがあり——ご存知のようにイギリスでは簡単に手に入らないものです——手持ちの3ポンドでは足りないのです。このところどうにも気が減入って仕方ありませんが、家に帰ればすべて解決するものと思います——特にお父さま、あなた、ブランウェル、アンの元気な顔を見れば。身体のごあいが悪いわけではないのです。調子を崩しているのは心の方なのでですから——不安のために²⁾。

何とか元気を出しましょう——さようなら。

C・B

- 1) シャーロットは最終的には1844年1月1日にブリュッセルを発った。
- 2) この時期、特にブランウェルにも父親にも心配すべきことは見あたらない。

(1999年10月27日受理)